

山口, 2017. 11. 16-17

Day6 胚が出生児に与える影響

¹一色 納菜子、¹宮崎 友佳、¹水野 里志、¹福田 愛作、²森本 義晴

¹IVF 大阪クリニック、² HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

生殖補助医療 (ART) において Day5 にて胚盤胞に至らない発育の遅い胚であっても、Day6 まで培養して胚盤胞に到達すれば移植胚として用いられる。このような発育の遅い胚は、Day5 胚盤胞に比べ移植後の妊娠率が低いことや、細胞分裂装置の異常を持つ細胞の割合が高くなるなどの報告がされているが、Day6 胚盤胞由来の出生児の詳細な報告は少ない。本研究では発育速度が遅い Day6 胚盤胞が出生児に与える影響について、単一胚盤胞移植症例を対象として後方的解析を行った。

【対象と方法】

2008 年から 2015 年の間に Day5 あるいは Day6 で Gardner 分類において BL3 以上に発育した胚盤胞の凍結融解単一胚移植から単児出産に至った 982 児を対象とした。Day5 胚盤胞由来の児を Day5 群 (n=864)、Day6 胚盤胞由来の児を Day6 群 (n=118) とし、両群間で出生児体重、出生児身長、在胎週数、性比、先天性異常率を比較検討した。

【結果】

出生児体重、身長、在胎週数、男児率および先天異常発生率は、それぞれ Day5 群では 3058.3 ± 478.9 g, 48.7 ± 2.6 cm, 38.7 ± 2.1 週, 54.7%, 4.6%であり、Day6 群では 3058.3 ± 413.2 g, 48.9 ± 2.8 cm, 38.5 ± 1.6 週, 58.5%, 2.5%と両群間に有意な差は認められなかった。

【考察】

本研究では Day6 胚盤胞由来の出生児は Day5 胚盤胞由来と差はなく、従来の胚盤胞移植と同様の安全性が確認できた。よって Day6 でしか胚盤胞が得られない症例に対しても胚移植実施が可能であり、妊娠断続すれば出生児への影響は Day5 胚盤胞と同等であることが明らかとなった。